

2020年12月3日(木)

老球の細道579号

ゴールと通過点

会津バスケットボール協会 室井 富仁

駅伝は日本で生まれた競技である。世界陸連においてもこの競技のネーミングは最近まで「Ekiden」となっていた。「Ekiden」はマラソンの距離の42・195km(死に行くゴ)を6区間に分け、5-10-5-10-5-7・195kmを走る。

駅伝の歴史は東京遷都50周年を記念して1917年「東海道駅伝徒歩競争」が始まりと言われる。江戸時代、東海道五十三次における「伝馬制」が、首都と地方の間に16kmごとに置かれた「駅」ごとに利用されていたことから「駅伝」という名前がつけられたという。

日本ではこの駅伝が大人気で、お正月の箱根駅伝などは今や国民的行事となっている。そもそも箱根駅伝は世界で戦えるマラソンランナーを育てるためにできた大会で、そのねらいにそって陸上関係者が大会を育ててきたらしい。しかし、箱根駅伝などがマスメディアから大きな注目を集めるようになると、選手が駅伝で勝つためにだけ努力するようになり、その先のマラソンまでモチベーションが継続できなくなってしまった。

今や日本陸連長距離界の悩みは、選手が、長距離選手としては通過点である箱根駅伝をゴールとしてとらえ、そこで燃え尽きてしまう。そのために、その先にある世界に通用するマラソンランナーへのゴールまでモチベーションが継続できなくなっていることである。最近日本で強力なマラソンランナーが育たないのはこのようなところに原因があるらしい。

翻って、私たちバスケットボール界はどうだろう。選手として、チームとして強くなっていけば、会津地区大会、福島県大会、全国大会、日本代表、世界選手権、五輪、NBAとバスケットボール選手としてのキャリアはステップアップしていこう。人それぞれゴール(目標)をどこに設定するかでその選手のパフォーマンスは決定的に変わってくる。

地区大会を勝って県大会に出場することがゴールのチームと、県大会で優勝し全国大会に出場することをゴールにしているチームとでは毎日の練習に対する取り組み方、かける時間、お金などに当然差がでてくるだろう。その結果パフォーマンスにも大きな差が表れる。

県大会で活躍したいチームは地区大会は通過点に過ぎない。全国大会で活躍したいチームは県大会は通過点である。将来日本代表、NBAを目指す選手は全国大会も単なる通過点であろう。通過点で燃え尽き、満足してしまっは肝心のゴールまではたどりつけない。

私たちはゴールの高さ、大きさ、凄さによって限りなくパフォーマンスを向上させることができる。通過点で満足してはいけない。もちろんあきらめてもいけない。

これから、あらゆるカテゴリーで新人大会がスタートする。目標は大きければ大きいほど良い。目標がつまらないと考えや習慣を変え、本気で何かしようという気にならない。通過点で満足しないで、あきらめないで、ゴールをもっと遠く、もっと高いところに設定して毎日準備して燃えてほしい。どれだけの可能性が自分自身に秘められているのか自分でもわからない。神のみぞ知る。であれば、現在二流、三流といえども目指すは超一流である。